



8 号

1971. 3. 5

- ◎ 革命戦争の開始を  
共産同赤軍派日本委員会
- ◎ 1・25 蜂起戦争、武装闘争勝利  
政治集会  
革命戦線 京浜安保共斗共同声明
- ◎ 三里塚斗争連帯アピール

共産主義者同盟赤軍派日本委員会

## 日帝はハリコネコである

国際階級闘争は、インドシナ革命戦争 — 中国 — 朝鮮を軸にした、アジア革命戦争の戦略的前進と、米帝 — 米軍の歴史的敗北と戦略的後退、更にはソ連の防御のかつ人民戦線による持久戦陣型の構築と州共同体 — 独ソ不可侵条約、米 — ソ SALT交渉に体现される核体制の再編を軸に展開されている。とりわけ、アジア革命戦争の戦略的前進と米帝の戦略的後退という国際階級闘争の基調は、構造的過剰資本・過剰生産から国際的に膨張した経済と、国際ブルジョアジー — 諸帝国主義列強の共同利害から、日帝を、その政治＝軍事的力量をこえて、特殊に国際反革命の前線へと押しだしつつある。我々は、これを敵の弱み — 味方の強みとして捉えられるだろう。即ち、日帝が勝利の展望なき侵略反革命につきすすまざるをえず、自己の政治プラン・スケジュールが革命戦争と米帝の動向に規定され左右され、混乱させられることを意味し、そのことは支配者の政治的動揺・亀裂を生み、潜在的な国民的危機 — 軍の動揺の基盤となっているからである。そして、そのことは日本革命戦争の永続性の最大の根拠であり、味方の突出した闘いが広い波及力と深い衝動性を有していることを意味している。敵の力量を越えた侵略反革命と、敵の弱さはPrと内部の政治的反発と徹底したPrと人民への犠牲の転嫁を生みださざるをえないし、全階級的な政治危機の潜在的恒常化としてあるからである。

とりわけ、朝鮮南部と沖縄は、インドシナ革命戦争に直接的に規定され、影響され、それ自身一つの前線へと転化していく傾向を有しており、日本革命戦争にとって、沖縄問題、南北統一朝鮮革命戦争と在日朝鮮人の問題は重要な環として存在している。

## 日帝の支配構造

ここで、革命戦略 — 具体的な諸方針について述べる前に、日帝の支配構造、戦略的布陣をみておこう。日帝は、戦前には寄生地主制、戦後には小農保護政策をもって都市に対抗する要素を常に一方の戦略的基盤とし、Brの都市住人(とくに工場Pr)に対する支配力の弱さ、不安定さを農村によって戦略的にカバーしてきた。しかし、60年代以降、都市戦略に移行してきていることを見ておかねばならない。即ち、基幹産業Pr・独占企業のPrを他の被抑圧階層と徹底的に分断し、前者を沈める手段をもって封殺し、Br体制の基礎に組みこむという戦略であり、独占資本 — 帝国主義労働組合 — 行政官僚機構の三位一体の体制として捉えられる。かかる支配体制をみださんとする。そして他方で、街頭闘争 — 闘争主義(とくに文

## 革命戦争の開始を

共産同赤軍派日本委員会

日本の戦士たちは、今、戦場にその足を踏みこんだ。

困難な公安との攻防の中で、最初の銃声と共に日本革命戦争を開始すること。そのことに全てを集中している。それはまだよちよち歩きの赤ん坊を街の中にはり込み込んだようなもので、いつ真赤な若い命をつみとられるかも分らない。確かにその可能性は高いが、我々は、武器に指をかけたのだ。

日本共産党(革命左派)の盟友たちによる銃奪取を我々は全面的に喜び、支持した。しかし、何よりも、何よりも、彼らに続き、彼らと共に日本革命戦争をかちとることを固く決意したのである。

我々は自らの生を、革命戦争開始の榮譽をもってつらぬくことに誓いをもっている。

歴史的な2月17日以降の攻防は、多くの教訓を我々にもたらしてくれた。(2人の戦士と貴重な武器の大半を、敵に奪われてしまったが、)作戦・地下体制。我々は全智全能をもって敵との攻防に勝利するだろう。

一方成田闘争は、決定的な攻防としての代執行をめぐって激しく展開している。都議選にむけての“部隊”温存の中核派は別にしても、ソジエト派の無展望、無方針は、バリ撤去→更なる進取の中で、何十度目かの露呈としてあらわれ、革命戦争開始前段で決戦を余儀なくされた農民闘争の革命的戦術の展開がとわれている。

日本革命戦争は、英同志の死と2人の革命戦士の重傷・逮捕という驚愕の敗北にもめげず、武装のための軍事行動をもって開始をつげた。我々は2・17の成功を攻勢への転換と捉え、これを連続させ、本格的な軍の遊撃戦の開始と、更なる武装のための闘争を成功させようとしている。プロレタリアート人民は、かかる遊撃戦を支え、結合し、蜂起→革命戦争(革命軍による運動戦の常態化)の陣型構築に全てを集中しなければならぬ。

帝国主義の打倒をめざす、全ての兄弟達、我々は、帝国主義をこの地上から徹底的に叩き倒す運を明らかにし、兄弟達に連発 — 革命戦争の戦いに加わることを要求するものである。

頭 — 競争を通しての彼らの政治的組織化一般の延長上でそれを構想するものではない。それらは唯、体制の補完物、せいぜい人民戦線左派にとどまらざるを得ないのである。我々の観点は共産主義と工場 P r t の結合、即ち武装闘争と工場 P r t の結合である。

自力では体制を突破しえない革命主体としての P r t と自力では蜂起を実現しえない武装闘争勢力は、武装闘争の勝利 — 大衆的武装反帝闘争の前進でもって、戦略的に結合し、革命軍を創出することが問われているのである。ブルジョアジーの産業構造・独占体の高度化、管理通貨—国独資を経済的基礎にした、前述の戦略布陣は、前述のこれまでの先進国革命を封殺するものとして組織されている。工場 P r t が体制を揺り動かす闘いに登場していくのは、前述した B r の布陣、支配体制が動揺し、政治危機が動揺し、政治危機が深化し、互解しはじめる時であり、この動揺と互解を決定的にするものとして登場するであろう。この支配体制の互解は、歴史的には敗戦と共にあったが、今日それを与件とする者は敗北主義である。かかる状況は、意識的に、闘争によってつくり出されていかねばならない。この闘いは、機動隊の、更には部分的に自衛隊の反革命暴力に対抗し、打ち破りうるもの、かつ持続的なものでなければならぬ。

まとめるならば既に述べてきた如く、日本革命戦争は二つの戦略ライン — 戦略部隊をもっている。体制の基礎にくみこまれている工場 P r t とそれ以外の被抑圧階層である。概括的にとらえれば、前者は、大衆スト→武装占拠制圧→蜂起の道を歩み、後者は、街頭武装闘争→蜂起の道を歩むだろう。しかも、前者は後者の闘い抜きには闘いそのものが開始されないし、後者は、前者の闘い抜きに蜂起を勝利させえないのである。

この二つの戦略部隊を結合するのは、革命軍部隊の組織化であり、臨時革命政府の政綱であり、かかる統合を、共産主義と世界革命戦争戦略から、党の軍隊を軸になしきる、党の建設が要である。当然かかる党の建設は、政治組織指導部の問題ではなく、共産主義を組織し、革命戦争を領導する軍人たる前衛の組織であり、国境を越えた党派闘争と軍事行動、非合法地下組織を意味しているのである。

### 日本革命戦争の戦略的發展段階

日本革命戦争の戦略的發展段階は、以下の如く想定しうるだろう。

第一段階は、党の軍隊や諸々の戦闘団による遊撃戦の段階であり、第二段階は、その遊撃戦と結合した、P r t 人民の大衆スト — 工場地区の武装占拠制圧であり、第三段階は、首都を要とし、主要都市の連続蜂起としての蜂起（街……赤軍艦6で明らかにした連続蜂起は、世界

通通信部門と中小争議）に対する機動隊による封殺を行い、この二つの基礎の上に、P r t 議会制度と政治的分割（政党配列）が成立しており、その外枠を自衛隊が固めているのである。

政党配列に関していえば、小ブル平和主義の社会党 — 人民戦線派の日共は、すでに帝国主義支配構造の一環にくみこまれ、帝国主義労働運動の攻勢にも敗北し、ますます右傾化の道を歩んでいる。公明党は、中道議会主義を基本路線としているが、その基盤としての都市下層プロは、ファシズムの温床であり、自民との結合や、社会右派 — 民社党との合同よりも、ファシズムを主流にした分解からの可能性を秘めているとみられるだろう。

かかる支配構造からして、工場 P r t の闘争はそれ自身からは決して体制を揺さぶる闘争をつくりださないし、発展しない。他方、他の被抑圧階層の闘争 — 街頭闘争は体制を揺さぶる地点に行きつく時、機動隊の反革命暴力に直面し、その突破は量的にはイタチゴッコの限界で爆發的に波及せず封殺される。ここで我々は、この支配構造をつきくずす戦略と発展段階をみきわめることを問われているのである。

### 二つの戦略部隊を結合させ、革命の軍隊創出を！

敵の壊滅は、大部隊（革命軍）による運動戦によってのみ達成される。

故に、戦略の軸は、この革命軍をどのような階級・階層からどのような闘いを通して形成するかとして扱われるだろう。日本は高度に中央集権的な都市集中型の工業社会であり、都市の闘争が決定的である。そして、かかる革命軍は、都市の被抑圧階級層から形成され、農村は、蜂起の過程においてよりも、蜂起の後に補助的役割を負って登場するだろう。

我々は、日本革命戦争戦略の環を、味方の先制攻撃による運動戦の始まり、移行としての蜂起（都市の蜂起）に設定することができる。そして勝利した蜂起は、臨時革命政府を組織し、革命軍を大々的に拡充し、P r t 人民の武装を進め、国際的運動戦の一環としての全国的攻勢 — 国際的攻勢に移らねばならない。

それでは、我々は、日本革命戦争戦略をいかに把えるのか。これまでの先進国革命論は、組織された工場 P r t を主力とし、大衆スト・ゼネスト→デモ→自衛武装・工場占拠（ソビエト）と市街戦→蜂起の発展段階として扱われていた。そしてそれ以外は、同時に政治路線そのものが社会主義革命としてではなく民族民主革命として設定されてきており、かかる先進国革命論を止揚するものには至らなかった。

我々は、何度も明らかにしてきたように、これまでの先進国革命論をとらない。革命主体としての P r t を否定しないが、P r t の組織化を“生産点での闘い”や経済闘争の激化や、街

未だストとしてしか闘っていないけれども急速に蜂起へと移行しなくてはならないことである。故に、この段階での基本任務は、ストライキ委員会等といった大衆的闘争機関とは独自に、大規模な武装部隊を直ちに組織し、その訓練、地域的進出、先行するバルチザンの革命軍部隊（我が中央軍—ゲリラ軍もこの中に含まれる）との結合（実は先行する軍隊が組織するのだが）をもって、Pr革命軍部隊へと転化し蜂起へと練成することである。そして、これはサンディカリスト、ソビエト派（新左翼の残り滓）との激しい意識的争と中核的カードを党員が担うことによるのみなしとげられるのである。

### 中央軍の遊撃線と結合し、大衆的 武装反帝闘争を激発させよノ

それでは、今、我々は何をなすべきなのか。今、我々は、第一段階の本格的開始を実現せんとしている。武装のための軍事行動は、遊撃戦の開始→持続と更なる武装のための軍事行動へと発展させねばならないのである。そして目的意識的に、第二段階の準備を進めねばならない

それは、蜂起の全体的計画から規定された工場Pr tへの浸透（政治的—組織的浸透）、即ち、蜂起—戦争陣型へのPr t人民の組織化である。が、しかし、そのことは、宣伝—オルグによるのみなされるのではなく、中央軍の遊撃戦と結合した、大衆的武装反帝闘争による帝国主義の弱さ・民衆への攻撃を、ゲリラ的に叩き、あるいは徹底的に抗戦し、政治的に包囲し、反攻する闘いを通じてしかありえないのである。

このことの組織的表現は、我が革命戦線（=R F）に集中的にあらわれる。R Fは、全国委員会の下、いくつかの中間的組織をヘン地区R Fで構成され、その地区R Fは、各地区、工場等々に秘密フラクションを組織することになる。そしてR Fは、同時に、各地区ゲリラ軍として存在するのである。

R Fは、中央軍の遊撃戦と結合し、指導されながら、テロルやサボタージュ等々の大衆的な遊撃戦と軍事的には遊撃戦の性格をもった大衆的武装反帝闘争を担い、革命的なPr t人民をかかえる戦いに組織し、その中核部隊としてあるのである。そのような戦いを通じて、半合法的な大衆戦線の中に、秘密フラクションを拡大し、蜂起戦争陣型にPr t人民を統合し、第一段階の大衆的発展と第二段階の準備がかちとられるのである。

人民は起ちあがらないと絶望している、自称左翼諸君。冬の時代だと錯覚して、ぬくぬくとこたつの中で苦悩しているインチケンチャ諸君。赤いはおのじょじょはいて、おんにもでたいと待っていた。みよちゃん、太善蔵や6月××のような敗北を、くやんでもくやみきれ

革命戦争戦略レベルのものである）→臨時革命政府の樹立、全国的=国際的攻勢（=恒常的運動戦）の段階である。

軍事組織的にみていくと、第一段階は、少数単位からなる自立的な戦闘団の形態であり、第二段階では、もっと大きく、整然としたものになる過渡期即ち蜂起軍への過渡としてあり、第三段階では、革命の軍隊、即ち国際旅団になっていく正規軍部隊として成長する。勿論、我々の中央軍=党の軍隊は、第一段階から機能別組織=スタッフ制参謀部を中心とした「正規軍」であり、党的意識性に貫かれており、世界赤軍への志向とその一部隊としての自覚をもった軍隊である。

第一段階の任務は、遊撃戦を持続し、拡大し、警察—機動隊をマヒさせ、政治危機を招きよせ、懐化させ、深化させることであり、同時に、第二段階への準備、即ち蜂起戦争陣型の構築として設定される。

戦闘形態は、一般的にいえば、バルチザンの市街戦、テロル、サボタージュ、奇襲、徹夜、占拠（これは一時的な宣伝・政治工作のための）etcである。しかも、これらは、暴動、大衆的デモンストレーション・ストライキを伴いながら展開するだろうし、又三里塚や北富士、長沼、日本原といったような地域的闘い、農民の半合法的な拠点闘争も又、それ自身として持続する。そしてそれらを、蜂起戦争陣型に統合することは可能だし、我々は積極的にそれらの帝大衆闘争の中に入り、遊撃戦戦術をとり、工作活動をすすめていこう。

一方公労協関係等の経済ストは、それ自身革命的でなくとも、交通—通信部門を始めとして広大な社会的機能マヒをおこすものであり、積極的に準備し、戦略的に結合・統合していこう。

それでは、この第一段階に登場する階層はいかなる階層だろうか。沖縄の民衆、未解放部落、在日朝鮮人を特殊の結び目とする。学生・高校生と下層Pr t（小零細企業のPr・臨時工、社外工、日雇いPr t、etc）や青年労働者である。そしてこれらは、同時に反革命部隊との暴力的な対立をもって登場するのである。我々はこれらの部分の力、矛盾、エネルギーに依拠しつつも独自に党的立場から中央軍—ゲリラ軍を組織し、独自に遊撃戦を展開する。中央軍やゲリラ軍は、各々自立的なイニシアチブをもって、様々な地域で軍事行動を起し、参謀部の指導—指揮の下に、中枢に向けての攻撃作戦や全国的意義をもった作戦を行うだろう。

第二段階への移行は、第一段階の遊撃戦が一定の大衆的規模に拡大し、市街戦—街頭の大衆的制圧、バリ戦等と結合した（拠点）大衆スト—武装占拠として始まるだろう。

そして、この段階で重要なことは、ゼネストに未だ転化・発展しなくても、又多くの大衆が

## 1・25蜂起戦争・武装闘争勝利政治集会万才！

武装闘争をめざし、最も戦闘的に闘い、最も弾圧を受けている京浜安保共闘と日本革命戦線が、固く団結し、多くの最も先進的な日本人民と共に遊撃戦争の道をつき進むことを高らかに宣言した1・25蜂起戦争・武装闘争勝利政治集会は、米帝の“北ベトナムの滅亡も辞さぬ”決意のラオスへの侵攻が激化している中で戦闘的に闘いとられた。

「71年はわれわれの年である」と宣言し、“故柴野同志の虐殺に対し、必ずや階級的報復をなし遂げよう”といい、沖縄返還協定を必ず阻止しようというこの集会は72年沖縄ニセ返還を粉碎し、アジア全面侵略戦争を打ち破る力強いものであり、遊撃戦争へつき進み、反米愛国闘争の勝利への道である。

この集会の集会宣言を転載する。

### 集会宣言

本集会に結集された全ての革命戦士諸君！

われわれ、革命戦線 京浜安保共闘は、蜂起戦争・革命戦争統一戦線に結集し、全ての革命戦士諸君が世界革命戦争勝利に向けた、固い決意と敵権力に対する限りない憎悪をもって、直ちに武装 — 蜂起戦争に決起されんことを公然と呼びかける。

全世界は今や烈火の如き革命戦争の嵐につつまれている。インドシナ三国人民によるブノンベン大攻勢をはじめとするA・A・L A人民の革命戦争は、先攻的攻撃を開始し、また、労働者国家においても中国、北朝鮮、キューバを先頭として、国際反革命に対する革命戦争の準備を着々と進めている。そして又、帝国主義心臓部においても世界革命戦争派が誕生し、成長し、A・A・L Aの闘い、労働者国家の闘いを結合し、単一の世界革命戦争に統合されつつある。

日本においてもトキの声は発せられた。67年10・8闘争を実力闘争で闘いぬいた日本人民は、大阪、東京戦争、大菩薩、ハイジャック、そして一連の基地爆破闘争（実は政治ゲリラ闘争と基地爆破闘争）を闘う中で、実力闘争を更に飛躍させ、萌芽的な武装 — 蜂起を開始した。

昨年12月18日、故柴野春彦同志を先頭とする三名の英雄的革命戦士は、武器奪取闘争を闘った。そして、故柴野同志は、岡部貞司の凶弾に倒れ、佐藤・渡辺同志は重傷を負った。我々は彼ら英雄的革命戦士の武器奪取闘争を断固支持する！ そして我々は、同志の虐殺に対し、必ずや階級的報復を成し遂げるであろう。彼ら革命戦士の闘いは受けつがれるだろう。我々は、

ない柴野烈士の死をくり抜けながらも、H J — 2・17を実現し、今待たずして街にとびだした。我々は“主観主義者”である。春は待たない。まっ赤な温かい血を流してひきずりだすのだった。

勝利の道は明らかである。全ての反帝戦士たちは、我々の開始する遊撃戦に続き、結合しようではないか。

兄弟たち！

中央軍に志願せよ！

建党 — 建軍の戦いに全ゆる支援を集中せよ！

そして、帝国主義の攻撃を遊撃戦で応え、あるいは政治軍事的に徹底抗戦し、政治的に追い詰め、包囲し、反攻し、殲滅せよ！

全ての生きとし、生きる兄弟たち。彼らの熱意に満ちた攻撃をみのがすな。全生活をかけて起ちあがれ！

—— 自らの肉体と精神を、銃にくくりつけて戦う

インドシナの革命戦士の魂にうたれて ——

## 三里塚闘争連帯アピール

日本革命戦線準備会全国委員会

併 2月22日から始まった強制代執行は、3月7日、ついに六つのバリケードが破壊され、のべ500数十名の逮捕の中で終了を宣せられた。これは2月22日に、R.F.全国委員会から出された。アピールであるがそのまま掲載することにした。

三里塚闘争が2月22日からの強制代執行と、それに対する塹壕とじこもり戦という段階に入った。三里塚闘争の革命的戦術とは何か。我々は一体何をなすべきか。我々は今、日本革命戦争の開始に全力を集中している。武装のための軍事闘争から軍の遊撃戦争—R.F.作戦の工作、大衆的遊撃戦の本格的な開始に集中しているし、日共(革命左派)の戦士たちによる銃演習の成功は、開始にむけた攻勢への転換をかちとったし、我々はそれに続き、革命戦争の永続的發展度をめざさねばならない。

我々がその革命的戦術を確定するためには、三里塚闘争の位置を明らかにしなくてはならないし、更に現段階の局面を、日本階級闘争の中で把握、その戦術を、党—軍—R.F.の闘いに統合するものとして確定せねばならない。

三里塚闘争は、日帝の国際空港建設に対する地主たる農民の反対闘争であるが、その本質として、①成田空港建設は、日帝のアジア侵略・反革命にむけた、軍事基地建設である。②農民の自然発生的な反権力土地防衛—反戦の闘争は、目的意識的な日帝の侵略—反革命粉砕の闘争として組織され、農学労統一戦線を現出させ、68年2~3月のように、67年10・8によって開始された大衆的実力闘争を受けついで公団解体闘争として、三里塚闘争の飛躍と共に、日本階級闘争の大衆的実力闘争を普遍化する役割を果たしている。③かかる、三里塚農民と現闘争それと密接に結びついた、革命的左翼の戦線は、空港建設を遅らせるが、69年12月16日—11・5にみられる時間表の限界点からの敵の実力行使の段階に入っていく。とりわけ9月のいわゆる「シロ戦争」は、69年12月16日の「成田空港建設に関する事業認定」にもとづく、第三次強制測量に対する、遠いつめられた三里塚戦線の抗戦としてあった。その後、11・5について敵権力は、三里塚を特別公共事業に認定し、特措法強権発動にふみきったのである。三里塚農民を軸とする三里塚戦線は最後の決戦陣型に入った。

④戸村一作氏は、「日本全農民の蜂起を訴える」(破防法研究)で、「特措法の申請を日本

日本人民の先頭に立って、彼らの屍を踏み越えて、連続的蜂起に向けた遊撃戦を勝利的に闘いぬき、必ずや革命戦争に打ち勝つだろう。

米帝国主義は、米軍基地の再編強化、四次防、国防白書による自衛隊の増強、経済の軍事化、入管法などによる在日アジア人民へのより一層の直接的弾圧、そして「安保」体制を「アジア核安保」体制に拡大強化し、72年沖縄「返還」=自衛隊派兵を71年4月にくり上げて、これをテコにして、アジア全面侵略戦争を必死になって策動し、第三次世界反革命戦争を開始せんと狂奔している。

我々は、これらの米日帝国主義の侵略、抑圧、反革命にいかに対決するのか、結論は鮮明である。A・A・L.A人民の闘い、労働者国家の闘い、そして又、先進国における闘いを見よ！戦争を見よ！

我々は何よりも、侵略戦争、世界反革命戦争の心臓部日本での遊撃戦を闘い、武装—蜂起闘争を連続的に闘いぬき、世界反革命戦争を世界革命戦争で打ち破るため世界プロレタリアートの先頭に立って闘いぬくことこそ、我々、蜂起戦争派、革命戦争派の重要かつ崇高な任務であり、我々はこれを必ずなしとげるだろう。

我々は、世界の革命戦争に学んでいる。我々は、世界の人民の闘いの成果をうけつぎ、また大菩薩、E・J、一連の基地爆破、とりわけ12・18英雄的革命戦士の武器奪取の闘いに学び、必ずや革命戦争に勝利するだろう。蜂起戦争派、革命戦争派が結集して、成功裡にかちとられた本集会の意義は、単に言葉としてではなく革命戦争に結実させなければいけない。

全ての革命戦士諸君は、英雄的革命戦士に続け！

日米帝国主義者どもの組織破防法弾圧に対しては、われわれは、遊撃戦、連続的蜂起で応えるだろう。

71年4月沖縄返還協定を阻止せよ！

71年は、われわれの年である。蜂起戦争派、革命戦争派は結集せよ！

そして、全世界を獲得する光榮ある任務を全うし、人民の未来を先頭に立って切り開こう。

1971年1月25日

1・25蜂起戦争武装闘争勝利政治集会

与える弱い者の勝利にむけた戦術である。

まずその前に、農民・全共闘・反戦の共同声明による今回の戦術をみておこう。以下の4点である。

- (a) 農民・現闘部隊は地下壕死守戦
- (b) 大衆的結集で死守戦防衛
- (c) 弾圧への大衆的糾弾
- (d) 周辺宣伝隊の派遣

ここから塹壕死守戦は、味方の死をも含めた犠牲を伴う戦術であるところから、我々は否定するのが正しいだろうか。三里塚闘争は、敵の強制代執行を阻止することが問われている。そして力関係は、そのことの可能性をきわめてせばめている。執行部隊を撃退する陣地戦。機動戦、遊撃戦は、機動隊3000を撃退せねばならず、それには彼らを上回る兵士、武器（その相関関係による総体での力）が必要である。そしてそれは日本中どこにもいない。ゲリラ戦も、小規模のゲリラ戦を軸にした戦術では代執行に対する軍事的効果も小さいし、充分な兵士・武器機動性もほとんど不可能である。塹壕死守は卓抜した、そして英雄的で革命的な戦術である。

我々は、小規模のゲリラ活動を否定するのではない。遊撃戦の開始・連続・発展こそが、日本革命戦争の鍵であり、蜂起も又実現しうるのである。全ゆる大衆戦線の闘いがこれを軸にすることは、我々の前提である。故に塹壕死守戦に呼応したゲリラ活動を結合し、2・17に開始された日本革命戦争の開始への転換＝攻勢に続く。軍の諸作戦と呼応した大衆的遊撃戦を実現し、革命戦争への道を更に前進させることである。

塹壕死守戦は闘いの始まりである。革命戦争派の遊撃戦——運動戦——の一環として、あらゆる手段を通じて、たちのき作業を破壊し、三里塚反革命のいっさいの豚どもを殲滅する闘いの始まりである。

日本革命戦争万才！

日共（革命左派）万才！ 我々は続くぞ！

成田強制代執行粉碎！ 遊撃戦で農民、現闘団の闘いを支持し、連帯するぞ！

大衆的遊撃戦を全地平で開始せよ！

軍に志願し、戦争と地下組織に全ゆる支援を集中し、ゲリラ軍を組織し、

連続蜂起——遊撃戦に結集せよ！

全農民は、農民切り捨ての屍政の一環として70年代日本階級闘争のなかに止揚すべきである。」

「三里塚・芝山農民に加えられる特措法を日本全土の農民が自分自身への強権発動として、生活に止揚する時点で三里塚闘争をはじめ、すべての基地闘争の勝利が定まるのである。全農民の蜂起を訴える」と主張している。日本プロレタリアート人民は、日帝の諸政策を、日帝の侵略反革命戦争にむけた。軍事外交——なしくずレファシズムの一環であり、その内実は、一切の犠牲を、日本プロレタリアート人民を始めとする全世界プロレタリアート人民に転嫁するものであり、総力をあげて粉碎することが問われる。とりわけ帝国主義的民族排外主義に統合されることを断固として拒否し、プロレタリア国際主義のもと、党——軍——RFの、共産主義を組織し、世界革命戦争に勝利する陣型に自ら加わり、敵権力の殲滅を追求せねばならない。戸村氏の蜂起は、同じ文章で3日戦争を「反対同盟の結束とその果敢な武装蜂起」として評価しているところから、「徹底抗戦」「不服従精神」の内実であり、軍事・武器の質も防衛的内容であると扱えられるかもしれない。しかし、我々は、強制測量に対する9・30～10・2三日間の闘いの徹底抗戦的質を批判することが場違いであり、革命的成田戦線に対する敵対であることを確認されねばならない。

⑤三里塚闘争の決戦段階での軍事の質が、防御であるのは、日本革命戦争の現状——とりわけ、党——軍——Fの遊撃戦すら実現していない状況からして当然であり、むしろそのような段階で開かれる個別戦線のとられる不可避で、革命的な戦術ですらあることを認識されねばならない。

党——軍が今だ遊撃戦争を開始しえず、そのための軍建設——武装のための軍事行動に入っただけの状況下で決戦を余儀なくされている大衆戦線にとって革命的な戦術とは何であるのか。（ましてや、昨年9月、革命戦争派の喪失下であったことを考えよう！

(i)まず、世界革命戦争を開始する党建設と戦いは開始されたし、これを永続的に発展させることが全階級闘争の鍵である。故に、全大衆戦線は、党——軍——Fの旗の下に結集し、軍に志願し、軍事——地下組織の兵站を担い、軍の遊撃戦に呼応した大衆的遊撃戦でもって、帝国主義の攻撃を加え、プロレタリアート人民を蜂起戦争陣型に統合せねばならない。

(ii)軍事的には、全ゆる方法、武器でもって帝国主義の攻撃をマヒさせ、あるいは阻止、粉碎するゲリラ的行動を軸にせねばならない。そのような戦闘の中から、大衆戦線内部に、ゲリラ組織を建設していくこと。

(iii)それでは、三里塚農民の塹壕死守による、強制代執行への抵抗戦を我々はどう評価すべきなのか。何でのゲリラは、ヒットエンドランであり、味方を確実に強くし、敵に確実に損害を

又、69年の秋の闘いで敵に奪われた指導的同志たちは、4～6年の下獄生活に入っている。そして、兄弟たち。塩見議長をはじめにHJの4人の同志が、未だに接見を禁止されたまま獄中にいることを忘れないうでほしい。

そして胸に兇弾をあびながら、なおも闘いを続け、永遠に倒れた柴野烈士や、銃傷の治療さえ拒否し、片手切断の一手手前まで追いこまれながら不屈の黙答を続けた二人の戦士の魂を、我々は観念の中ではなく、戦いの中で自らのものにするだろう。

この赤軍8号は、リーフレット形式で出されている。それが何を意味するか、今は語る必要はないと思う。我々は、帝国主義に怒りを持ち、戦争をなくす戦争＝革命戦争に感動する兄弟たちに、世界中の、そして我々の戦いを報告し、帝国主義の弱さと侵略、反革命抑圧を暴露し、戦いの方向性を提起するものとして、恒常化することに努めたい。たとえ、組織破防法下においてもである。この闘いを、軍建設 — 大衆的蜂起陣型の工作 — 国際活動と並ぶ、党の4つの柱として、遊撃戦貫徹の下にすすめる決意である。

## 赤軍8号発行に際して

赤軍8号は、実に3ヶ月半ぶりに出された。その間の闘いを、徹密な総括を踏まえて報告する余裕は、まだない。我々はまだ独立戦闘より、ひとまわりか、ふたまわりほど大きな組織であるにすぎないし、革命戦争の開始にある今、組織をかけた大きなシレンに対峙している。

11・22の7号から、我々は第二次綱領論争の獲得した地平(①共産主義を組織し、世界革命戦争を領導する党建設。②戦略的持久戦論としての世界革命戦争戦略の確定。即ち、世界的速決激主義＝前鋒路線の克服。③遊撃戦としての日本革命戦争の開始)の実践化の道を歩んだが、いくつかの混乱と敗北を経験してきた。

我々は、もう、我々の戦いの全てを、そして最も重要な戦いを言葉で伝達することを不可能にする段階に入った。戦いでこそ表明する榮譽を担うことに、ますます深く進んだのである。しかし、ここでは、この三ヶ月半の闘いを可能な限り報告しておこう。

党と中央軍は、遊撃戦の開始に今その全てを集中している。神田同志の逮捕は、のべ十数件のガサの口実を与え、我々はいくつかの後退を余儀なくされた。公安の執拗な追跡は、ますます大規模に、科学的に、機動的になっており、それは案の闘いではなくなっている。しかし豚は豚である。我々は、いずれ逃げる者の強みで逆襲を試みるだろう。

R Fは、50名弱の隊列で、公安と日向一派との対峙の中で、11・22蜂起戦争統一行動 — 12・8～10新潟叛軍集會をかちとっていった。しかし第二次綱領論争の負の側面 — 6月××敗北以降の軍事的能動性の欠落、論争の機能主義的運営 — を反映した、宣伝・組織主軸の大衆的蜂起準備運動・蜂起戦争統一戦線論に基づくR Fの活動は、時を同じくして解体過程に入っていたと云える。12～1月と続いた慢性的な、公安との攻防における敗北は、確かに組織活動の混乱と停滞をもたらしたが、主体的には、第二次綱領論争の二つの負の側面の克服 — 整風運動の道を踏みしめ、他方で、4度の日向一派との大衆的ゲバに敗北しつつも、12・26柴野人民葬で京浜安保共闘との共同集會を実現し、日本革命戦争の開始に総力を集中する。彼らと我々は、1・25の共同集會を九段會館でかちとった。スタは1名、1・15集會2名の逮捕を出しながらも、集會は400名の労働者・学生を前に遊撃戦開始の宣言をしたのである。

2月以降、我々は、四月蜂起のフレームアップの下、激波作戦・組織破防法前段の本格的な攻勢の中で、地下体制を整えつつ遊撃戦準備を進めてきた。

更に、大菩薩の不屈の蜂起戦士たちは、今日1年4ヶ月目の獄中での夜明けを迎えている。